
守護獣嘘伝

冬野こたつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守護獣噓伝

【Nコード】

N7096G

【作者名】

冬野こたつ

【あらすじ】

ある雨の日、輝陽は不思議な少年と出会う。少年は、守護獣という狼の姿をした不思議な力を使えることができる、そして、輝陽を守るためにここへ来たという。その少年は、今失踪中の指名手配犯である父と関係があるようで……。

第一章 出会い

雨の匂いがする。多分、出口はこっちだ。もう少し。もう少しで逃げ切れるはず。捕まってたまるか。俺は逃げ切らなくちゃいけない。どうしても。あいつに会うまで。捕まるわけにはいかないんだ。そう呟きながら、少年は暗いトンネルをひたすら前へ前へと進んでいた。やがて光りが見え、それが、このトンネルが外の世界へつながっていることを教えてくれていた。

——気を抜くな。

頭の奥から声が聞こえる。自分のものではない、低く、よく響く柔らかいが冷たい男の声。

「分かっているさ……」

少年はその声に応えながら外へと踏み出した。

——出会い——

その雨は朝から降り出し、午後になった今もなお、やむ気配を少しも見せなかった。

——ずっと降ってればいいのに。

そんな事を考えながら、空波輝陽は空を見上げた。雨は相変わらず勢いよく地面へと降り注いでいる。ふわりふわりと雨の匂いが漂う。この瞬間が、輝陽はたまらなく好きだった。雨の匂いと、雨を受けているものたちの音が、たまらなく好きだった。

「おい」

背後から声をかけられ、輝陽は驚いて反射的に飛び退いた。

「…っ、つくも……」

「そんな道の真ん中にいたら、通行の邪魔になるだろう」

「あ、ご、ごめん」

謝る前に、相手はさっさと脇を通り抜けて行った。

そらなみつくも

空波九十九。彼は輝陽の同居人で、父方の親戚にあたる人だった。母は自分が生まれてすぐ他界。父は指名手配中の逃亡犯。そんな輝陽を引き取ってくれたのは、九十九の両親だけだった。九十九の両親は、父親が大会社の社長。母親はテレビに出るほどの名医で、家は和風の大きな屋敷だ。

——小さい頃は、よく九十九とも一緒に遊んだ。自分が犯罪者の息子だなんて、知る必要がなかった。あの日までは。

駄目だと首を振る。立ち止まっていると、悪いことしか頭に浮かばない。帰ろう。

帰ろうと思うのに、足は家の方に向いてはくれない。とりあえず歩こう。そう考えて、反対方向へと足を進めた。ふと、塀と塀が隣接した間の、細い道が目に入る。どこかへ、何かへ通じていそうな道だ。輝陽はほとんど無意識に、その道へ近づいた。幅は大人一人がやっと通れるくらい。これなら、余裕で進めるはずだ。まず一步。足を踏み入れる。さらにも一步…と、確かめるようにゆつくりと前へ進んでいく。

もう五分くらい歩いたんじゃないか。そう思ったとたん、ざあつと風が凧いで、道が開けた。そこには、神社があった。といっても、一見しただけでは神社とは判断がつかず、伸び放題の雑草の間からかろうじて見えている鳥居と、その奥にあるらしい祠で、ああ神社なんだと確信することができた。

「こんなところに神社なんてあったんだ……」

ゆつくりと奥へ進みながら呟く。

「……………う……………」

奥の方から微かに人の声のような音が聞こえてくる。一瞬怯みはしたが、思い切ってそこへ進んでみる。

「……あつ」

そこには、全身びしょぬれの、顔のよく整った長身の少年が倒れ

て
いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7096g/>

守護獣嘘伝

2010年10月20日12時48分発行